**大阪府障がい者自立支援協議会　高次脳機能障がい相談支援体制連携調整部会**

資料５

**高次脳機能障がい支援体制整備検討ワーキンググループ**

**「高次脳機能障がい支援連携ツール」ワーキンググループ（以下ワーキンググループ）**

**について**

１．「高次脳機能障がい支援連携ツール」とは

目　　的：「高次脳機能障がい支援連携ツール」を活用し、複数の支援者が障がい特性とその特性に応じた支援方法を共通に理解し、地域での切れ目のない支援に生かすことを目的とする。

対　　象：主たる障がい名が高次脳機能障がいであり、地域での支援を受けながら社会生活をめざす方。

内　　容：　 （１）全体支援経過表

（２）連携ツール

（３）アセスメントツール

（４）追加情報

（５）その他情報

活用方法：支援の流れの中で協力を得られた、各医療機関や支援機関の支援者（医師、ＭＳＷ、ＯＴ、ＳＴ、ＰＴ、福祉事業所や就労支援の担当者など）が主となり記入する。「高次脳機能障がい支援連携ツール」は基本的に本人・家族が所持し、連携時に現在関わっている支援機関に記入してもらい、次の支援機関に情報を伝えていく。

２．ワーキンググループ開催の報告

**第１回　（平成２７年１２月４日　１４:００～１６:００）**

**第２回　（平成２８年１月２５日　１４:００～１６:００）**

★ワーキンググループにおける委員からの主な意見

|  |
| --- |
| **＜ツールの利用目的・・・何に使うのか？目的は何か？＞** |
| * 福祉と医療の狭間にいる方等、様々な状況の方がいる。支援連携ツールがだれに向けて使われるのか視点が整理されていないのではないか。
 |

|  |
| --- |
| **＜ツールの利用方法・・・いつだれにどう使うのか？＞** |
| * このツールを、だれが、どのように使うのか、制度設計が十分整理されていない。（当事者が全ての情報を自分のものとファイルに束ねて持ち、それぞれの支援機関に記入を依頼するのか、それとも、各機関が支援に必要な情報として直接受け渡しするのか、その両方か。）
* 制度設計の中で、個人情報に関する本人同意のあり方についても整理が必要。
* 様々な既存のものを活用して、記載する医療機関等の手間が省ける形にしないと協力は得られない。既存のものとの整理をすべき。
* 病院から在宅に戻ってかなりたっても、自身が高次脳機能障がいであることにたどり着かず、孤立しておられるような方に、どう情報を伝えていくのか。
* 必要な情報をコーディネートする、見守るというような役割も必要。
* 当事者の家族の立場から見る限り、その人の評価に関するところは本人が嫌がると思う。自分が思っていることと他者からの評価は違う場合もあるが、本人の自己評価より他者の評価が低い場合は、自分の手元に置いておきたいとは思わないだろう。やはり本人に持ってもらうものと支援者やキーパーソンがもつものとを分けるべき。
 |

|  |
| --- |
| **＜ツールとしてのその後の展開・・・周知、現状把握、支援方策の検討は？＞** |
| * 地域の支援現場では、つなげる先がない（受け皿がない）ことが大きな問題となっている。増えてくる高次脳機能障がい者に対して、どのようにこの連携ツールを活用し、どのように支援につなげていくのか整理する必要がある。
 |

３．平成２８年度　今後のスケジュールと内容

第３回ワーキンググループ（平成２８年５月頃開催予定）までの予定

（１）第１・２回ワーキングで出された意見に基づき、事務局の方で修正を加え、「支援連携ツール修正案」を委員に送付し、意見を聞き確認をとる。

（２）障がい者医療・リハビリテーションセンター、堺市立健康福祉プラザ生活リハビリテーションセンターのコーディネーター間で試行実施を行う。

（３）試行実施の中から出てきた気づきや問題点を協議しながら、再修正を加える。

（４）「支援連携ツール」を使用する上での、マニュアル（利用の手引き）を作成。